



TITLE:

上海の天文臺を仰ぐ

AUTHOR(S):

比屋根, 安定

CITATION:

比屋根, 安定. 上海の天文臺を仰ぐ. 天界 1939, 19(215): 140-140

ISSUE DATE:

1939-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167783>

RIGHT:

上海の天文臺を仰ぐ

比 屋 根 安 定

利先生諱瑪竇號，西秦大西洋伊太利亞國人，自幼入會眞修，明萬曆壬午年航海，首入中華傳教萬曆庚子年來都，萬曆庚戌年卒在世五十九年，在會四十二年，撰文者 順天府尹王度麟。

支那は、明の萬曆十年、即蘇曆1582年の頃、伊太利亞人マテオ・リチが肇慶府に、基督教を傳へんために訪れた。彼は、數學、天文學、地理學に通じ、近代支那に西洋理學を輸入した代表者である。轉じて江蘇省の南京に留まり、禮部尙書王宏誨、給事中祝世祿とも交を締した。萬曆二十八年、マテオ・リチは北京に上り、上表を奏して神宮に謁し、基督像を獻じた。偶々、報時自鳴鐘(めざまし時計)を修理して、皇帝の信望を得、遂に順治門内に基督教會堂を建つる便宜を賜はつた。マテオ・リチは、支那名を利瑪竇と呼び、教化を蒙つて基督信者になつたものも尠くはない。

その最も著明なるものは、徐光啓である。彼は、「明史」に傳せられる名士で、累進して禮部尙書、東閣大學士に至つた。教名の伯祿は、パウロの當て字である。彼は、宣教の諸師父と協力して、西洋曆を譯し、その郷里なる上海の西郊には、教會堂を建つると共に、天文臺を設け、天氣時氣象の觀測に従うた。その後、清朝の中葉におよび、徐光啓の建立の教會堂は一時廢れたが、南京條約により、上海が貿易港になるや、基督教布教の自由は徐氏の遺業を再び興すに至つた。今日、この天文臺は、毎日、世界六十餘箇所の天文臺、氣象臺と通信して、東方亞細亞の氣象を司つてゐる。わが日本の中央氣象臺の觀測に、最も有力なる寄與をなしてゐる。揚子江流域の氣象の變化は、絶えず我が日本のそれに重要な影響をもたらすが、未だ變化の來らざるに先んじて、報告を日本に傳へるものは、徐氏の遺業である。

北平の西北に柵欄兒墓地あり、マテオ・リチ利瑪竇先生が眠つてゐる。その碑文は、初めに記す如くである。「帝京景略物卷五」によると「萬曆庚戌瑪竇卒、詔以陪臣禮」とある。〔五餅二魚(隨筆集)より〕

田中博士と竹田學士の計

本會員元京大講師田中宗愛博士は二月1日急性肺炎にて御逝去せられた。重れて二月16日本會の前理事長、京大助教授竹田新一郎學士が急逝せられた。謹みて哀悼の意を表します。改めて次號に兩士の追悼文を掲げます。

東 亞 天 文 協 會